The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞荒木浩著『徒然草への途ー中世びとの心とことば』
Author(s)	勢田, 道生
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 178-179
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70994
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

荒木浩著『徒然草への途――中世びとの心とことば』

勢　田　道　生

『徒然草』が日本古典文学を代表する名作であることは、言うまでもない。しかし、きわめて個性的で魅力的なこの作品を文学史上に位置付けるのは、容易ではない。『徒然草』は日本文学史上に孤立した作品であるようにも見える。

なぜ『徒然草』はそこに生まれたのか。本書はその必然を、『徒然草』と周辺の諸テクストとの関係から解き明かす。問題の中心は、副題の通り、「中世びとの心とことば」である。以下、本書各章の標題を示した上で、本書の論点のいくつかを、稿者なりに紹介する。

序章――本書へのいざないと展望
第一章　心に思うままを書く草子――徒然草とは何か
〈補論〉その一　「ものぐるほし」について
その二　「硯にむかふ」女
その三　兼好と「小野」
第二章　心に思うままを書く草子
――〈やまとうた〉から〈やまとことば〉の散文史へ
第三章　徒然草の「心」
第四章　徒然草と仮名法語
第五章　ツクモガミの心とコトバ
第六章　和歌を詠む「心」
第七章　和歌と阿字観――明恵の「安立」をめぐって
第八章　沙石集と〈和歌陀羅尼〉説――文字超越と禅宗の衝撃
第九章　仏法大明録と真心要決――沙石集と徒然草の禅的環境
第十章　『徒然草』というパースペクティブ

本書の中心となる論点の第一は、『徒然草』における「心」の把握の問題である。そもそも「心」はどこにあるのか。現代人は「心」を、自身の身体の内部にあるものと捉える。しかし、『徒然草』の周辺には、「心」は自己の外部から来るという言説が存し、それは「鏡」の比喩を伴い、その心の「鏡」に「妄心」がうつることこそが心の澄明を証するという言説が存在したという。このような文脈では、「心にうつりゆく」ことは「妄心」であると同時に、それを見つめることが「悟り」への通路ともなる。このような流れの上に『徒然草』が発生する必然が見出されるのだが、著者はそこに至る道筋を、日本における禅の受容、特に『仏法大明録』をめぐる禅のテクストの詳細な分析から解き明かす（序章、第三章、第四章、第九章）。

第二は、和歌と散文の問題である。歌人兼好にとって、心に思うことを「言ひいだす」のは和歌の領分であったはずであり、『徒然草』の直前には、心に思うままを表現することを強く主張する京極為兼の歌論も存在した。しかし、二条派歌人としての兼好は、為兼を批判する二条派の枠組みを、和歌においては逸脱しない。むしろ、散文としての『徒然草』は、為兼歌論の裏返しの

ように浮かび上がることが示されるのだが、ここで著者は、兼好のものとされる古今注説における「歌」・「ことば」の定義や、自撰家集に記される編纂方針から、「やまとうた」の枠組みを超えて、心に思うままを「やまとことば」によって記す「散文」としての『徒然草』に至る道筋を示す（第二章）。

さらに問題は唯識論へと連なり、『撰集抄』や中世古今注、さらには『沙石集』の和歌観から、「心に思ふこと」を「言ひ出だす」和歌は、外界のすべてのことがらを心の所産とする唯識的思想によって「悟り」への道としての正統性が付与されたこと、その一方で、このような「内」の悟りへと向かうベクトルに対し、『徒然草』はその起点を共有しつつも、そのベクトルは「心にうつりゆく」外部に向かい、そこに、「心」の枠組みを脱してあらゆるものを映し出す『徒然草』が発生したとする（第六章）。なお関連して、第七章では、特に明恵著作や『沙石集』を材料として和歌と阿字観との関連の問題が詳論され、第八章では和歌陀羅尼説について、先行研究の整理を通じてその多様な流れを確認した上で、「〈顕密・禅宗〉兼学」によって創出された『沙石集』独自の和歌陀羅尼説を位置付ける。

第三は、『徒然草』という散文の表現方法の問題である。『枕草子』跋文を踏まえ「謙遜」のスタイルに類似する序段は、謙遜の条件となる外的要因を排除していること、その一方で「謙遜」のスタイルは「謙遜」の外的要因を狭めてゆくと〈反古・手習〉に近づき、そこに自照性への道が開かれることを指摘するとともに、「硯に向かふ」というキーワードの分析から、『源氏物語』の浮舟に代表される、他者の目を想定しない「手習」という和歌のスタイルと『徒然草』とのつながりを解明する（第一章）。また、『枕草子』と『徒然草』との関係の詳細な分析から、『徒然草』は『枕草子』を念頭に置きつつ、その視点の相違を強く意識していることを指摘するとともに、このような視点を兼好に獲得せしめた要因の一つとして、「あづま」に関する章段の分析から「あづま」体験を挙げ、このことが「よそながら見る」ということばに象徴される兼好ならではの視点を獲得せしめたとする（第十章）。

以上、『徒然草』を直接的対象とする章を中心に、本書の論点のいくつかを紹介したが、これだけでは本書の本質を紹介したことにはならないだろう。本書は標題の示すとおり、「徒然草への途」を明らかにするものである。『徒然草』を中心として、多様で膨大なテクストが提示され、それらは明確な問題意識のもと、鮮やかに位置付けられる。その問題意識の大きさと論理展開こそが本書の本領であると、稿者は考える。問題は『徒然草』自体のみにあるのではない。本書では、さまざまなテクストの関係性から「中世びとの心とことば」の枠組みが鮮やかに描き出されるのである。本書をどう受け止めるのか。後進の責任も、また問われていよう。

（勉誠出版、二〇一六年六月、四四〇頁、七、〇〇〇円＋税）

（せた・みちお　本学特任講師（常勤））